

マイヤースの通信

永遠の大道

(194)

第一部 死後の世界の實在

一章 永遠の謎 ― “なぜ？” ―

人間はいずこより来ていずこへ向かうのか——この命題については、古来、多くの思想家や宗教家が思索を重ねてきた。しかし、一体何のために人間なるものが創造されたのか、なぜこの広大な宇宙は、見たところ何一つ失われることなく、ただ元素が入れ替わるのみで、諸相^{すがた}を変えながら永遠に虚空を巡回し続けるのか——こうした疑問について具体的な解答を施したものは無かったように思う。

“目的無き巨大な機械”——これが過去の科学者たちが書き下した解答であり、そう断定することによって知識人としての面目を保ったつもりでいた。しかし、これには “なぜ？” に対する解答がない。すると当然そこには何の目的成就もない。物質のみが唯一の實在であり、運動と生命だけの、無気味で単調な機械的ドラマが永遠に繰り広げられていることになる。これはまさに恐怖である。

もとより真理というものは捉え難いものである。が、右のような情けない結論に到達した科学者たちは計り知れないほど真理を捉え損なっている。その間違いを修正する力ギは、精神が物質から独立した存在を有するという事実にある。そ

の事実さえ受け入れることができれば、この不可解きわまる存在の謎を解明する可能性は十分にあるのである。

私はまず、この宇宙の謎を解く力ギを簡潔にまとめておきたい。次の六項目を科学的仮説として採用することによって永遠の謎に対する解答が得られるかも知れない。

- 一 仮相と実相がある。
- 二 物質と魂と霊の三つの要素がある。
- 三 表現があればその根源がある。
- 四 神とは統一原理である。
- 五 物質は微より極微へと無限に分解する。
- 六 全ては霊に帰る。

我々は旅する霊である。その個霊の集団（類魂——第六章で詳しく解説）を統括する、より大きい霊が存在する。人間にとってはこれがいわゆる “大我” であり、我々 “小我” を霊的な光によって養い導く、神の思念の一つである。

この大我も個性をもつ存在である。が、人間的な意味での個的存在ではない。創造神そのものではなく、創造神の一部でありながら、ある意味で独立している。言うなれば創造され、生命を賦与されたものという意味で、創造神とは別個の存在である。

ところで神秘思想家はよく人間の内奥に神が存在すると言う。これは全く真相を捉え損ねた説である。神とは超越的大精神、全生命の背後の心、純粹理念としての統一、存在の初発^{アルファ}も終末^{オメガ}も抱え込む完全体である。過去幾度となく出現し

ては消滅して行った物的宇宙の全歴史の中のあらゆる行為、あらゆる思念、あらゆる事象がその完全統一の中に収められているのである。そこに全存在の根源がある。それが己^{おのれ}の精神の奥に存在するなどと言うのは思い上がりも甚だしいと言わざるを得ないであろう。

その大根源である大精神から生まれた無数の思念体、俗に言う霊は、一つ一つが他と異なる個性を有するが、そのうちの多くの者、ほとんど全てといってよい者が、自らの力で物質を通して自我をコントロールし表現ができるようになるまでは、無垢ではあるが、粗野で未熟な萌芽でしかない。完全の域、つまり完全な叡智を身につけ実在を悟るに至るまでには、数かぎりない経験を積み重ね、数かぎりない形態を通して自我を表現しなくてはならない。

そこに至って初めて神的属性を身につけ、一切の形態を超越し、宇宙の大精神の中に融合し、完全統一の一部となり切るのである。(訳注——「そのうちの多くの者、ほとんど全てといってよい者」)という表現を裏返せば、そうでない者もいるということになる。私見ではイエス・キリストのような超高級霊、シルバーバーチのいう神庁の、“光り輝く存在”、日本神話でいう“神代七代”の神々のような存在のことを指しているものと思われる)

それゆえ宇宙の存在理由、全ての現象の存在理由、日常のささいな人間的喜びや悲しみの存在理由は「霊性の進化」の一語に集約できるかと思う。すなわち“制約”を通し、また“形態”を通しての完全への成就の必要性があるということである。霊は萌芽の状態から発達し、形態を通しての“表現

”を重ねることによって初めて成長するのである。我々もその目的のために地上に誕生し、死後も数かぎりない界層ないしは境界を経験することになっている。他方、物的宇宙は精神の表現の場を提供すべく、無限の拡張を続けている。

かくして永遠の謎である“なぜ?”、すなわち宇宙の存在の目的は、“精神”が程度と種類を異にする“物”に宿って進化を遂げること、という一文に集約できるかと思う。精神は表現することによって発達し、宇宙は無限に拡大し威力を増しつつその表現の場を提供し、かくして精神が真の実在の観念を把握する。

あらゆる物的存在に生命を賦与する大精神すなわち神の思念体である人類は、神の表現の中でも最低級の存在であり、神的存在すなわち完全統一の有益な一部となるための巡礼の旅を、これから始めねばならないのである。

二章 死後の界層

旅する魂がたどる行程を一覧すれば、およそ次のようなものになる。

- (一) 物質界
- (二) 中間境
- (三) 夢幻界
- (四) 色彩界
- (五) 火焰界
- (六) 光明界
- (七) 超越界

各界の中間、つまり次の界層へ旅立つ前の段階で、それまでの全体験を振り返り、そのまま次の界へ進むべきか、それとも後戻りしてもう一度やり直すべきかの選択をする境涯がある。

(一) 物質界

これは人間がすでに馴染んでいる、物的形態に宿つての体験を積む世界である。これは地球上に限らない。遙か星辰の彼方の無数の天体上でもほぼ同様の体験が得られる。宿る物的身体が地上の人間の肉体に比して、その構成要素(原子)の振動数が高いものもあれば、低いものもあるが、大体において、“物質”という用語の中に収めてよい。

(三) 夢幻界

物質界で送った生活の記憶や願望の反映、言わばまぼろしで築き上げられた界層である。

(四) 色彩界

五感による束縛から脱して、自らの意思で環境を支配するようになる。とは言え、まだ形態に宿つての生活であり、従つて広い意味での物的存在であるが、その物質は極めて稀薄なもので、“氣”と呼ぶのが相応しい。

色彩界はまだ物的生活を送った天体と直結した大気圏に属している。

(五) 光焰界

魂はこの界層に至つて初めて自己の属する、靈系を同じくする仲間たち(類魂)が、統括靈のもとで織り成している靈的宿命を自覚するようになり、その喜怒哀樂の情緒的生活の

全てに通曉^{つうぎょう}する。

(六) 光明界

この界に至ると各靈は、先輩の類魂たちが残した全生活の知性的側面の意義に通曉すると同時に、後輩たちが今送りつつある物的生活における情緒的側面にも通曉する。

(七) 超越界

ここに至つて統括靈およびそれによつて養われている類魂が融合調和し、宇宙の大精神すなわち神の中へと流入する。そこには、“完全”の概念、出現しては消えて行く宇宙の全て、ありとあらゆる形態の存在、過去、現代・未来の現象のすべてが包含されている。

ここにおいて初めて、瞬時として途切れることのない意識、真の実在となる。

三章 夢幻界

何はさておき、まず、昼となく夜となく、浜辺に打ち寄せる波のごとく靈界入りしてくる新参者の群れについて定義してみよう。

言葉というものが用をなさない、思念中心のこちらの世界へ来て久しくなる私自身には、“生”と“死”は同じものを別の観点から見ているだけであることが明瞭に分かり、それを用いると妙な気持ちになるほどで有る。

〈五感という名の牢獄〉

今あなたが置かれていた環境は、あなたがまだ精神的に自由になり切れていないという意味において、あなた自身がこしらえたものと言うことができる。つまり現在の生活環境は

あなたの身体の神経や感覚が伝達してくれるもので出来あがっているに過ぎないものである。

もう少し説明の仕方を変えてみよう。もしあなたが精神的自由をい得て自我の内奥にまで意識を深めることができれば――要するにそれまで五感が伝達していた形態というものが存在しない世界に入れるように訓練すれば――あなたの視界から物質界が消滅する。もはや物質界を意識しなくなるということである。霊的に十分に成長すれば形態の世界から完全に脱することができるということであるが、実際問題としてそこまで到達するには、数え切れないほどの体験を必要とする。

が、死後、高次元の世界へ至れば知性がその力を増し、形態をコントロールすることができるようになる。形態に生命を吹き込むことができりようになるということである。例えば彫刻家が粘土をこねて形態をこしらえるように、自らの精神力で生命と光を引き寄せ、自らのビジョンの通りに緩急をこしらえることができるということである。

自らのビジョンの通りと言っても、最初の段階ではそのビジョンは地上時代の経験と記憶によって制約されているので、出来あがる環境は地上時代の環境と外観がよく似ている。

夢幻界においては、自らの思念によって環境をこしらえると言っても、まだその深層心理の中に感情的願望が多分に残っているので、形態を整える過程において無意識のうちのその願望が入り込んでいる。個性をそなえた一人前の霊となつたつもりでいても、まだまだ地上時代のパーソナリティーと現在の身体の制約の中に閉じ込められていることを理解しな

くてはならない。

四章 意識

地上の人間にとって意識とは毎日が覚めるごとに点灯されるランプのようなものである。体調が勝れない時は炎は弱く、若くて元気であれば明るく燃え上がり、辺りのものを明るく照らし出し、光輝を与える。

その、毎日点灯される意識も、年齢とともに、そしてまた体験を積むにつれて変化する。もとより僅かずつの変化は気づかないであろうが、一年一年、着実に変化しており、決して同じではない。その意識の主体である自我こそが見、聞き、触れることによって物的環境を感じしているのである。

この得体のしれない自我は、地上においては各種各様の要素の複合体である。死んで肉体を捨てた後も、またその後いくつかの界層をへて重大な変化を遂げた後も、やはり存在の中心はこの自我である。死後どの界層に所属しようと、今やその自我は、肉と血、脳細胞、その他、物的身体という一個の統一組織と形態を脱ぎ捨てた身軽な旅人であると言えよう。

まといっている身体は肉体よりはるかに精妙なものになっている。それにも各種の伝達機能が具わっており、それが精妙な原子で構成された新たな組織に生命を与えている。その組織は何度も述べているように極めて精妙で稀薄であるために、人間の肉眼はもとよりのこと、地上の科学者が考案するいかに精巧な機械をもつてしても捉えられない性質のものである。その霊的身体はどこにも痛みというものを感じることがない。と言うのは、こちらの世界では精神の支配力が飛躍的に

増大し、靈的ないしは精神的な意味での苦痛を覚えることはあっても、地上的ないしは肉体的な意味での痛みを覚えることはない。つまり形態が精神の支配者となることはないというものである。

六章 類魂

《靈的意識の集團》

類魂は、見方によっては単数でもあり複数でもある。一個の高級靈が複数の靈を一つにまとめているのである。脳の中に幾つかの中樞があるように、靈的生活においても、一個の統括靈によって結ばれた靈の一団があり、それが靈的養分を右の高級靈から貰うのである。

地上時代の私もある一つの類魂団に属していた。が、自分以外の類魂と、その全てを養う統括靈——これらは根に相当すると考えればよい——は超物質の世界にいた。靈的進化の真相を理解せんとする者はぜひともこの類魂の原理を研究し、また理解しなくてはならない。これによって、例えば従来の再生説だけでは説明のつかない難問の多くが見事に片づく。

私はこの説を決して安直に述べているわけではない。例えば人間が地上に生をうけるのは、前世での罪の代価を払うためであるというのは、ある意味では真実である。が、その前世とは、自分の生涯といえると同時に自分の生涯ではないともいえる。つまり前世とは自分と同じ靈系の魂の一つが、私が誕生する以前に地上で送った生涯をさすもので、それが現在の自分の地上生活の型をこしらえているのである。

現在私が居住している超物質界には無限に近いほどの生活

状態があるので、私は私の知っているかぎりのことしか述べられない。断じて誤ってはいないとは言わないが、大体これから述べるところを一つの定理と考えていただきたい。

さて、ソウル・マンとなると大部分は二度と地上に戻りたいとは思わない。が、彼らを統括している靈は幾度でも地上生活を求める。そして、その統括靈が類魂どうしの強い絆となつて、進化向上の過程において互いに反応し合い、刺激し合うのである。従つて私が靈的祖先という時、それは肉体上の祖先のことではなく、そうした一個の靈によって私と結びついている類魂の先輩たちのことをいうのである。

一個の統括靈の中に含まれる魂の数は二十の場合もあれば百の場合もあり、また千の場合もあり、その数は一定しない。ただ仏教でいうところの宿業カルマは確かに前世から背負つてくるのであるが、それは往々にして私自身の前世のカルマではなくて、私よりずっと以前に地上生活を送った類魂の一つが残していった型のことをさすことがある。

同様に私も、自分が送った地上生活によって類魂の他の一人に型を残すことになる。かくして我々は、いずれも独立した存在でありながら、同時にまた、いろいろな界で生活している他の靈的仲間たちからの影響を受け合ふのである。

仏教が唱道する再生輪廻説、すなわち何度も地上生活を繰り返すという説明は、半面の真理しか述べていないというのは往々にして完全な誤謬よりも悪影響を及ぼすことがある。私自身は二度と地上に現れることはないであろう。が、自分と同系の他の魂は、私がかつて地上でこしらえたカルマの中に入ることになる。ただし私がカルマという用語を用いる時、

それは従来のカルマと同じものではない。私は私としての王国を持つている。が、それすら大きな連邦の一単位に過ぎないのである。

こう述べる、中にはソウル・マンにとつても一回の地上生活では十分ではないのではないかと言う人がいるかも知れない。が、こちらで進化を遂げると、同一の靈系の魂の記憶と経験の中へ入り込むことが出来るようになるのである。私はこの類魂説が一般的通則として規定するべきであるとは言わない。が、私の知るかぎり、私の経験したかぎりにおいて、断じて正しいと信じる。

この試論——そう呼ぶ人が多分いると思う——は、天才のケースに適用した時に極めて興味ぶかい。我々以前に地上に出現した魂は精神的にも道德的にも、当然、我々に何らかの影響を与えるに相違ない。従つてある特殊な類の内部で、ある特殊な能力、例えば音楽的才能が連続的に開拓されたら、最後にはその特殊な能力が地上の代表者に顯著に現れるはずである。即ち幾つかの前世中に蓄積された傾向が驚くべき無意識の情報となつて、一人の地上の代表者の所有物となるのである。

我々は、この死後の世界へ来て靈的に向上して行くにつれて、次第にこの類魂の存在を自覚するようになる。そして遂には個人的存在に別れを告げて類魂の中に没入し、仲間たちの経験までも我が物としてしまう。と言うことは、結局人間の存在には二つの面があると理解していただきたいのである。即ち一つは形態に宿つての客観的存在であり、もう一つは類魂の一員としての主観的存在である。

地上の人間は私のこの類魂説をすぐには受け入れてくれないかも知れない。多分死後においての不変の独立性に憧れるか、あるいは神の大生命の中に一種の精神的氣絶を遂げたいと思うであろう。が、私の類魂説の中にはその二つの要素が含まれている。即ち我々は立派な個性をもった存在であり続けると同時に、全体の中の不可欠の一員でもあり続けるのである。

私のいう色彩界、とくに次の光焰界まで進んでくると、全体としての内面的な協調の生活がいかに素晴らしく、またいかに美しいかがしみじみと分かつてくる。『存在』の意義がここに來て一段と深まり、そして強くなる。また、ここに來て初めて地上生活では免れない自己中心性、つまり自分の物的生命を維持するために絶え間なく他の物的生命を破壊して行かねばならないという、地上的必要悪から完全に解脱する。

類魂の真相が分かり始めるのは色彩界に到達してからで、そこから一大変革を遂げることになる。各自は一步一步に経験の性質、精神の威力を探りはじめる。その際、もしも彼がソウル・マンであれば、時としてとんでもない過ちを犯す危険性がある。類魂たちの知的ならびに情緒的経験に通曉して行くうちに、時として類魂中のある部分に作りつけの雛型に逢着することがある。うっかりすると彼はその雛型にはまり込んでしまい、幾千年にもわたって一歩も歩み出せなくなることがあるのである。

右の雛型というのは地上生活中に作り上げられた宗教的信条といった類いのもので、例えば狂信的仏教徒や敬虔けいけんこの上ないキリスト教徒が地上時代の信仰の轍わだちにはまり込んでしま

う。そこでは恐らく同系統の仲間も同じ教説によって足枷をはめられていることであろう。一步も向上しないまま、キリスト教的な夢想や仏教的な幻想がこしらえた想念や記憶の中に留まり続けるのである。言うなればタコの触手に引っかかったようなものであろう。その“タコ”が地上でこしらえた“死後”に関する想念であり宇宙観なのである。

そうした境涯が進歩を阻害することは理解できるであろう。別の譬えで言えば、それは一種の“知的さなぎ”のようなもので、そこでは過去の地上での考えのままの生活が延々と営まれている。向上の道にある者が客観的にその境涯を考察するのは結構であり必要でもあろう。しかし断じてその中に引きずり込まれたり、狭い牢獄に閉じ込められたりしてはならない。

十二章 死の真相

永遠の大道の旅人としてすでに“見えざる境界”を通過し、しばしば全く新たな認識をもって舞い戻ってくる我々にとつて、死は単なる偶発的一事象、ある種の優しさこそあれ、辛くも悲しくもない一挿話^{エピソード}に過ぎなくなっている。しかし地上界に身を置く人間にとって死は一夜の宿り、長い道中での休憩所のように思えることであろう。

またそれは、人によっては熱に浮かされた一夜となるかも知れない。恐怖におののく一夜となるかも知れない。奇っ怪な夢にうなされ通しとなるかも知れない。

いずれとなるにせよ、その中には静寂の時、うっとりとして深い休息に沈み行くような感覚を覚えるのが常である。が、

それも永続きはしない。魂にとっての夜明けがいつかは訪れる。すると、ある者にとっては朝焼けのごとき、またある者にとっては夕闇のごとき薄明りの中に、かつての顔見知り、おなじ宿命の糸によって結ばれた者たちがいることに気づく。

中略

さて読者は、各種の通信によって、死の現象の秘密を解くカギが自我のまとう身体の振動数の変化にあることを、多分、ご存じであろう。例えば地上の人間が外的環境を感知するのは、肉体の振動数が環境と同じある一定の範囲に限られているからである。あなたの振動数をその範囲外に変化させたとしよう。その瞬間に他の人間も大地も物体も視界から消えて失くなるであろうし、他の人間にはあなたの存在が見えなくなるであろう。

《宿縁の絆》

野心の彼方に、ありとあらゆる人間的利己心の彼方に、もがき争い、飽くことを知らない欲望の彼方に、愛または情愛という、同じ霊系に属する魂を引き寄せる無形の絆が存在する。

愛は死よりも強く、失望を克服し、有限の世界のありとあらゆる存在のどれ一つとして征服できないものはない。愛はまさに宇宙根本原理の一つと見なしてよく、未来永劫、各自が存在し続けるかぎり織り込まれていく“宿縁の背後の力”である。

死はその終焉^{しゆうえん}の孤独な姿ゆえに普通人には恐怖として映る。が、真相を知ればその恐怖が杞憂に過ぎないことが分かる。宿縁の人々、つまり情愛によって結ばれた人々と永遠に別れるという哀しみは、何の根拠もない杞憂なのである。と言うのは、死後いずこへ行こうと宿縁の型の中にいる点においては生前と少しも変わらず、一時の忘却がいかに深からうと、その後の体験がいかに多岐にわたらうと、地上生活で同じ宿縁の型に織り込まれた人々、深く愛した人々——その中には道ならぬ恋もあれば最後は憎悪と変わったものもあったかも知れないが——そういう人々と再び相見えることになっているからである。

人間は原始的であるほど、その愛は全身全霊的では有り得ないものである。献身的な愛こそ向上の第一義であることを理解するまでに靈性が発達していないということである。愛の中にこそ永遠の生命の種子が宿されているとの理解ができないのである。

そうした原始的な魂は、これから宿縁の型をこしらえて行くというその当初において、しばしば憎悪、強烈な怨恨のとりことなり、死後第三界へ行つてからもその憎悪を拭い去り切れずに地上圏へと引き戻され、事情次第では地上へ再生することにもなる。そして首尾よくいけば第一の靈的摂理、すなわち愛の摂理を学ぶことになる。

愛の摂理を悟った者はもはや死を恐れる必要はない。何となれば、いつ自分が地上界を後にしても、自分と宿縁のある他の誰かがそれをすぐに察知して、死後に始まる生命の大冒険の先達となってくれることを知るからである。

それゆえ死を友と思うがよい。救済者と呼んでもよからう。何となれば、地上的な愛のすべてに付きまとう闇と汚れは死とともに消滅するからである。

第二部 人間の精神的機能

一章 自由意志

“自由意志”という用語は用いる人によってその意味が異なるようである。ある人にとっては自分のしたいことをなるべく思う通りにすることが出来ることであり、またある人にとっては何らかの岐路に立った時に、自分の立場から見て最も魅力的な道を選択する権利でいどのものを意味するらしい。

その際、多分、自分では何ものにも影響されずに断固とした意志で判断したつもりであろうが、実際にはずいぶん片寄った視野で選択しているものである。では、一体何がその選択に当たらせるのであろうか。私はそれを身体と精神と靈の総和であると言いたい。

さて、総和である以上は、当然、その中身は種々雑多な要素から成り立っている。が、全体としては一つである。幾星霜をけみして徐々に形成されてきたもので、その中には当然、遺伝的影響力の全てが含まれているに相違ない。心靈^{サイキック}的な^{スピリチュアル}靈的影響も含まれているであらう。人間的感覚で見れば無尽蔵と言える。環境、友人、仇敵^{かたき}、親族などによる影響力が、それぞれに辿ってきた行路の選択に当たって、その内的要素となってきたのである。

そうなると人間が自由意志の絶対性を要求してみたところで、それは、人間という存在の本質からして出来ない相談を持ちかけていることになることがお分かりであろう。人間とは所詮、今生きている人やすでに他界している人たちによってこしらえられた創造物であることは明かな事実である。他人による善悪さまざまな影響力による生産物であり、無意識のうちに入力された性向に左右されるよう運命づけられている。言い換えれば全人類はある意味において一つであり、また別の意味において多数でもある。

地球開闢^{かいびやく}以来の人類の歴史および各自の性向は、間断なく増大しつつある途方もなく大きな網であると思えばよい。そしてその根源にはその網の目の一つ一つ、つまり開闢以来の全人類の歴史と性向に責任を持つ紡ぎ主、すなわち創造主が控えている。

そういう次第で、神が創造主であり紡ぎ主であるからには、各霊がいかなる人生を紡ぐかは出生以前から分かっている。母胎を離れる以前から新生児の本性の全てを知り尽くし、それがどのように発達して行くか、性向がどのような人生を招くか、環境によって性格がどのように形成されて行くかも分かっている。それというのも、哲学でいう“無”から新たな個性が発生する以前から、その全てが神の想像の中に存在していたからである。

つまるところ全ての現象は神が心に描いたからこそ発生したのである。が、まだ発生していない現象、神がその御胸に抱いていないものがある。それは各自の魂の中での変化、例えば人生の艱難辛苦や歓楽に対していかなる反応を示すかが

不明の部分である。地上生活においてはその反応の仕方が最大の課題である。悲しみに遭遇して挫けてしまいか。破滅状態に陥ったことが新たな生きる意欲を鼓舞することになるか。後者の場合では意志の力が大いに増大し、勇気を培^{つちか}うであろう。前者の場合は希望を失い、精神的に貧窮^{ひんきやう}し、性格の弱さを増すことであろう。

その選択、そのどちらを選ぶか、それが各自の自由意志の裁量に任されている部分である。自分自身の靈性の創造、魂の形成に係わるものだけは、自由意志による選択の余地が与えられているということである。

これは地上人生において極めて重大な要素となる。というのは、死後自分の属する類魂団に戻った時、自分が地上に残した人生の鑄型が、次に地上に誕生する新しい類魂の人生に大きく影響を及ぼすことが分かってくる。その辺の事情をこれ以上具体的に述べるのは、地上の言語では難しい。

神は無数の類魂団の宇宙生活を監視している。そしてその成長に応じて人類の未来を計画する。が、さきにも述べた通り、全てはその当初において神の御胸の中に描かれていたのである。従って、人間の自由意志の行使による変化があるといっても、この広大な宇宙的規範の中ではささやかなものでしかない。